

# 2010年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量													
	漁獲	産地		輸	輸 出		東京	消費支出	消費支出	在	加工品			
	生	冷	入	生	冷	缶	生	生(万円)	経節(g)	庫	缶	削	節	生利
21	275	43.3	200.9	53.3	21.8	0.1	10.0	1,028	308	30.6	14.4	18.6	36.0	3.2
22	304	68.3	212.6	59.6	62.3	0.1	13.9	1,126	303	26.5				
%	111	158	106	112	286	43	139	110	98	86.6	0	0	0	0

年	価 格						
	産地	東京	輸	輸出	消費支出	消費支出	
	生	生	入	生	生(円)	経節	
21	349	140	613	106	100	1,578	989
22	271	137	492	103	117	1,629	945
%	78	98	80	97	117	103	96

## 漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にするると大別し一本釣りともき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの2つの漁種により占められている。

中西部太平洋のカツオに関する漁業の特徴は、まき網漁業が中心で87%、竿釣り漁業が6%、その他の漁業が7%を漁獲している。まき網漁業については日本・韓国・台湾・米国の遠洋漁業国が5~6割を占め、他はインドネシア、パプアニューギニア、フィリピンが多い。竿釣りについては、日本が6割を占め、他はインドネシアが多い。日本周辺の中心的漁場の常磐・三陸沖漁場でも1980年代後半からまき網操業が増加し、年により漁獲量の半分近くを占めている。2010年の常磐・三陸沖漁場における水揚量は竿釣り3.9万トン、まき網2.3万トンと、過去5カ年の平均値(竿釣り3.9万トン、まき網3.3万トン)を竿釣りは横ばいを示し、巻き網は下回った。

戦後、日本の竿釣り漁業等の漁場拡大により総漁獲量は徐々に増大し、1960年代後半には20万トン、1970年代後半には40万トンに達した。その後、さらに熱帯水域のまき網漁業の規模拡大で急増し、1990年代には100万トン前後が漁獲され、1998年からは120万トン前後で推移し、2009年には過去最高の178万トンに達した。このうち北緯20度以北の日本近海での漁獲量は1970年代以降、9~21万トンで推移している。

この海域における資源状況は、漁獲による死亡の割合は増加傾向にあるが、自然死亡に比べて低い値に留まっている。新規に資源に加わる加入量は大規模な海洋変動現象の(エル・ニーニョやラニーニャ)影響が大きいと言われている。現在の漁獲圧はMSYレベルより下で、過剰漁獲にはならず、資源量もMSYレベルより上で、乱獲状態ではないと考えられている。

本資源は1980年代中期から高い水準が続いているが、現在資源水準は高位でその動向は減少傾向にある、といわれている。

インド洋では最近5年間の平均漁獲量(2005-2009年：49万トン)のうち、38%がEU(スペイン・フランス)とセーシェルを中心としたまき網漁業、32%が流し網漁業(主にインドネシア、イラン、スリランカ)、23%がモルディブなどの竿釣り漁業、7%がその他の漁業という内訳になっている。2006年までは全漁業の漁獲量が増加する傾向にあったが、そのうち特にまき網漁業の漁獲増大の比率が高く、FADsの利用拡大によるところが大きかった。最近では、まき網による漁獲のうち80%がFADsでの操業によるものである。また、西インド洋(FA051海域)と東インド洋(FA057海域)における最近5年間

における平均漁獲量の割合は、75%：25%となっている。

インド洋における日本のカツオ漁獲は、その殆どがまき網漁業によるものである。1957年以来、民間のまき網船1-2隻が1980年代半ばまで操業していた。1988年以降、まき網船数が増加し最大時には10隻となり、1992～1993年の漁獲は3万トンを超えた。また、1977年からの海洋水産資源開発センター（現在：水産総合研究センター開発調査センター）の日本丸が試験操業を開始し、現在まではほぼ毎年調査を実施している。1994年以降民間のまき網船数は徐々に減少し、最近5年間では日本丸の試験操業および1-2隻のまき網船（民間船）が操業を行っているだけで、漁獲量は2,000～4,400トンで推移している。

インド洋での漁獲量は1950～1983年は最大7万トン程度だったが、西インド洋でまき網漁業が本格化した1984年には10万トンを超え、1992年には30万トン、1999年には40万トン、2005年には50万トン、2006年に60万トンを超えた。2007-2009年は、ソマリア沖海賊問題によりソマリア沖500海里以内でEUのまき網漁船が操業を自粛したため、それぞれ46万トン、43万トン、43万トンへと急減した。

インド洋の資源は、現在資源水準は高位でその動向は横ばい傾向にあるといわれているが、以前に比べると悪くなっている、といわれている。

また、国内供給問題では、近年大型竿釣船の休・廃業（30年前の1/10程度）が多くなっており、燃油問題や資源問題も含めて、今後の経営不安要素も多い。

本年のカツオの漁獲量は、30.4万トンであった。

## 産地水揚量と価格

22年の産地水揚量は、28.1万トンで前年（24.4万トン）並みであった。

内訳は、生6.8万トン、冷21.2万トン（前年：生4.3万トン、冷20.1万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、釣りの初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）は比較的良かった昨年をやや下回った。しかし5月以降は漁況が上向きに推移し、黒潮前線を越えてから本格化する三陸・常磐沖での漁も、本年は竿釣りが好調で近年でも最も悪かった昨年を上回った。

一方まき網漁は昨年殊のほか低調に推移したが、本年は竿釣り同様6月以降漁況は上向き、水揚げも前年を上回った。

海域別漁獲量は、三陸68%（前年：48%）、常磐17%（前年：34%）、南西・東海1%（前年：3%）、九州西部7%（前年：5%）九州南部7%（前年：10%）であった。

本年も漁場形成の主体は三陸・常磐海域主体で、その他の海域での漁獲は低調であった。

南方竿釣りのカツオ（東沖を含む）焼津						海外まき網の状況（焼津）					
年次	単位		21年	22年	前年比(%)	年次	単位		21年	22年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	162	166	102	水揚隻数	隻	延	169	204	121
水揚量	トン	計	33,635	42,609	127	水揚量	トン		#####	#####	115
々	々	カツオ	21,396	29,567	138	1隻当た	々		745	708	95
々	々	キハタ他	12,239	13,042	107	水揚金額	100		17,815	22,335	125
1隻当たり	々	計	208	257	124	1隻当た	万円		105	109	104
水揚金額	100	計	8,133	9,604	118	価格	円/kg		141	155	110
1隻当たり	万円	計	50	58	115	水揚量	トン		99,647	#####	108
価格	円/kg	平均	242	225	93	1隻当た	々	カツオ	590	527	89
々	々	カツオ	218	196	90	価格	円/kg		124	124	100
々	々	キハタ他	283	292	103	水揚量	トン		24,081	34,676	144
						1隻当た	々	キハタ	142	170	119
						価格	円/kg		213	252	118
						水揚量	トン	メバチ	2,190	2,151	98
						々	々	その他	29	143	493

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方が前年(1万6千トン)をやや上回る1万8千トン、東沖が前年(0.6万トン)をかなり上回る1.1万トンで南方、東沖とも前年を上回った。一方、本年の海巻きは、カツオが前年をやや上回り、キハダ（キメジ）が前年をかなり上回り、メバチ（ダルマ）は前年を下回った。

### 消費地入荷量と価格

22年の東京消費地の入荷量は、生1.4万トンで前年（生1万トン）を上回った。

本年は6月型でその後は7、8月とコンスタントな入荷がみられ、夏から秋口にかけての入荷の増加もみられ順調であった。

近年カツオはB1製品の定着の中で市場外流通主体に「タタキ」や東沖「トロカツオ」等は周年商材として出回っているが、本年は漁況の回復もあって出回りはやや少なかったものとみられる。

本年は漁の回復から出回りも多くなっており、末端での消費も数量、金額とも昨年を上回った。

価格は、492円で入荷量の増加を反映し、前年の613円を下回った。

### 在庫量

なお在庫量は、2.7万トンで輸入が増加したものの、輸出が大幅に増加したことを受けて前年(3.1万トン)を下回った。

### 輸出入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、年々少なくなって僅かになっている。

本年は、原魚6.2万トン（前年2.2万トン）、缶詰60トン（前年140トン）であったが、原魚輸出は缶詰用として貴重になっているが、本年は国内漁が回復したことで、前年を大幅に上回った。

輸入は平成年度に入ってから円高傾向が本年は更に進んだこともあって増加した。これは節用需要の高まりで量、価格、品質とも安定している輸入物への依存度が高まっているためである。本年は国内漁の好調さあったが、円高も進み6万トンで前年（5.3万トン）を大幅に上回った。

したがって輸入価格は、103円で前年(106円)を引続き下回った。